

7 築170年の古民家を活用したゲストハウスの事業化支援 「内子を遊びつくす」を合言葉に

愛媛県・内子町 | 伊予銀行

ふらっと訪れても居場所として成り立つ。「ゲストハウス」は旅行者同士をつなぎ、旅行者と地域住民をつなぐ拠点となる。

重要伝統的建造物群保存地区に新しく生まれたゲストハウスは、地方銀行主催のビジネスプランコンテストに応募した移住者の起業により実現した。



内子町の古民家ゲストハウス&バー「内子晴れ」

内子町の概要

【人口】16,892人(2018年2月1日現在)

- ・町の中央部を一級河川・肱川の支流である小田川が流れている風光明媚な町。
- ・ハゼの果皮から得られる油脂である木蠟の生産地として栄える。木蠟の生産で財をなした商家などが約600mの道に立ち並ぶ内子町独自のレトロな町並みを活かし、内子ツーリズムや移住定住の推進に取り組んでいる。
- ・重要文化財の「内子座」や、「木蠟資料館上芳我邸」、「フレッシュパークからり(道の駅)」などが観光スポットとして人気。

伝統的な町並みに誕生した古民家ゲストハウス&バー

内子町は、愛媛県のほぼ中央に位置する中山間の町。江戸時代から明治時代にかけて和紙の生産や軟膏・石けんにも使用される木蠟(もくろう)の生産地として栄えた。旧街道沿いには、豪商の屋敷や町家が軒を連ね、1982年、四国で初めて国の重要伝統的建造物群保存地区(以下「伝建地区」)に選定された。

2017年11月、そんな趣あふれる地区の一角に、築170年の古民家を改装したゲストハウス「内子晴れ」が開業した。地域おこし協力隊として横浜市から内子町に移住した山内大輔氏による取り組みである。ゲストハウスとは、宿泊者同士のコミュニティスペースを備えた簡易・安価な宿泊施設のこと。山内氏は国内外の旅の経験の中で、人と人のつながりやすさや、旅の情報の入りやすさなど、ゲストハウスの良さを知ったという。

「ゲストハウスは、ふらっと訪れても、居場所としてなんとなく成

り立つ。いつかはそんな場所を内子町に作りたいという気持ちが強かった。この物件と出会った時、誰かゲストハウスをやればいいのにと感じた。いろんな人に勧めたが誰もやらない。結局、地域おこし協力隊の3年間の任期終了後、もう自分でやっちゃおうと山内氏は当時を振り返る。



内子の町並み



大正5年に創建された芝居小屋「内子座」の外観

伊予銀行「ビジネスプランコンテスト」への応募が契機

ゲストハウス開業に向けた準備を始めた山内氏は、伊予銀行が地域経済の活性化や雇用創出を目的に「いよぎんビジネスプランコンテスト」を開催していることを知り、さっそく応募。「内子を遊びつくす」をコンセプトに旅行者同士や地域住民のつながる場を

提供するというプランは、愛媛県南部の地域活性化に寄与すると「南予活性化賞」を受賞した。「内子の地域資源である古民家の活用という点だけでなく、山内さんの人柄や幅広いネットワークによって、地域に溶け込みながら、好循環を生み出すのではないかと



(左から) 倅いよぎん地域経済研究センター新藤主任研究員、山内氏、伊予銀行内子支店 佐伯支店長代理

いう点を高く評価しました」(伊予銀行 地域創生部 福嶋利昭氏) この受賞をきっかけに、伊予銀行は、山内氏に対してゲストハウス事業化に向けた計画策定、行政機関からの補助金活用等を支援。古民家の改修費用など資金面でもサポートを行っている。

「内子晴れ」の外観と仕掛け

山内氏のゲストハウスは、日常と地続きの非日常をすごせる場所、心が晴れやかになる場所という意味を込めて「内子晴れ」と名付けられた。外観は周囲の町並みに調和した姿のまま改装されている。

内子町八日市・護国町並保存センター土居正一所長は「伝建地区の建物は守り続けていかなければならない、まちの財産の一つ。ここが空き家になったときは心配しました。でも、伝建地区入口にあるこの建物が観光客や地域住民の新たな交流拠点として再生され、これまでなじみのなかった若い人たちが賑わっていることをうれしく思っています」と語る。

建物内には、古民家の雰囲気が残る太い梁や柱のほか、和紙の原料を使用した独特な編み天井や、木蠟が塗り込まれた一枚板のバーカウンターなど、随所に取り入れら



内子町 土居所長

れた「内子産」の素材や工芸品が目立つ。「宿泊者にそれらを一つひとつ説明し、興味を持った方には生産現場まで足を運んでもらう。そういう仕掛けを作りたいです。いろいろ探してみると内子町には本当に魅力的なものがたくさんあります。日帰りでも構わないので、数日滞在してもらって内子を遊びつくしてもらいたいです!」(山内氏)



古民家の雰囲気が残る半個室



和紙とその原料コウゾを使用した天井

人々をつなぎ、仕事を広げる

「このゲストハウスを拠点にして、旅行者同士や旅行者と地域住民など、いろいろな人々をつなげていくことで、内子町の活性化に貢献したい。例えば、これはグラスの大きさに合わせて内子の職人さんに作ってもらった地酒の飲み比べセットです。内子には、こちらのアイデアをすぐに形にできる専門技術に優れた職人さんが大勢いる。そういう人々とのつながりから、新しい価値を生み出し、県の内外からの集客や購買につなげてどんどん仕事を広げていきたい」。今後の展望を熱く語る山内さんの目は光り輝いていた。



飲み比べセットは地元木工職人の作品

Column

全国初の地域特化型求人・移住情報総合サイトの開設(愛媛県)

生産年齢人口の減少により地域の中小企業の多くは慢性的な人手不足に直面しています。各自治体においても産業振興の観点から地域の雇用創出が大きな課題となっています。

こうした中、愛媛県は、2017年10月、伊予銀行、倅いよぎん地域経済研究センターなど民間事業者4社とのコンソーシアムにより、地域特化型求人・移住情報総合サイトを開設しました。人手不足に悩む県内企業と主婦・シニア層等の潜在労働者や移住希望者を結び付け、地域の雇用拡大を目指しています。求人サイトや移住サイトは多くありますが、両方の機能を備えたサイトは全国初とのことです。この総合サイトの特徴は次の3点です。

- ①スマートフォンの専用アプリから、GPS連動の地図を使って希望する勤務地付近の求人情報が簡単に検索可能。
- ②Uターン・Iターン希望者のため、移住者のインタビュー記事や動画など移

住に関する情報を合わせて掲載。

③サイトへのアクセスログ(求職者の属性や位置情報等)を蓄積したビッグデータを分析し、県の雇用政策等に反映。

愛媛県総合政策課 政策企画グループ担当係長の藤本朋成氏は、「求職者にとって魅力のある求人情報をいかに多く発信できるかが課題です。伊予銀行各支店でのPRのお蔭もあって、400を超える県内の中小企業がこのサイトで求人募集を開始しました。専業主婦やシニア層などのまだまだ活躍できる人材の掘り起こしのほか、就業に伴う県内への移住に大いに期待しています」と話す。

サイト名は「あのこの愛媛」。愛媛県全体で5年間に3万人の雇用者増が目標です。



愛媛県 藤本係長